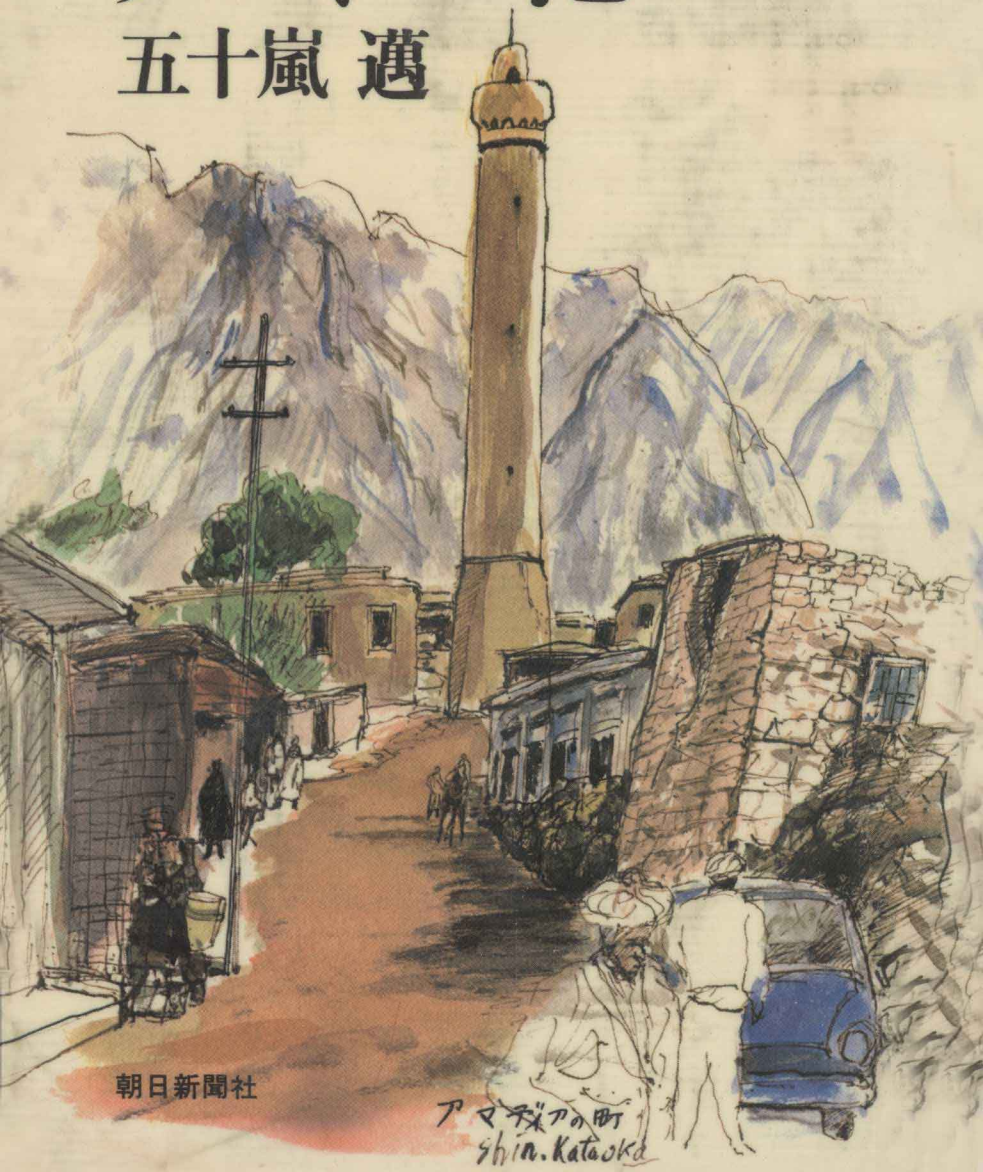
クルドの花

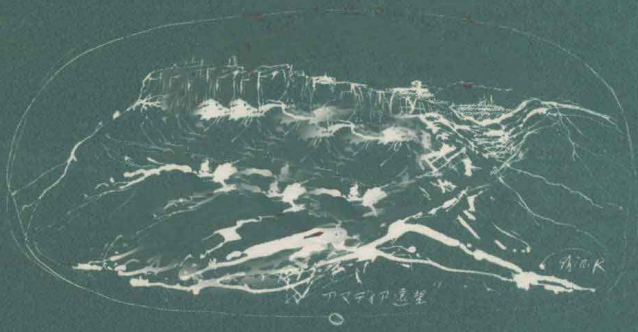
五十嵐 邁



朝日新聞社

クルドの花

五十嵐 邁



朝日新聞社

NETテレビ開局十五周年
記念懸賞小説優秀作

クルドの花
定価 六六〇円

発行 昭和五十年十一月十五日

著者 五十嵐 邁
装画 片岡真太郎
装幀 熊谷博人
発行者 角田秀雄
印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社
東京 大阪 北九州 名古屋
© Suguru Igarashi 1975

0093—254334—0042

クルドの花

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

一

暗い夜空で機が左に翼を傾けると、おびただしい灯火のきらめきが一斉に黒い地の底から湧き上がってきた。

それがバグダッドの町であった。

むらのない気圧に乗っているせいか、機はレールの上を滑るように全く揺れを感じさせない飛翔ぶりで空港に向かって舞い下りていった。

雄三は機の窓に額を押しつけてじっと地上に目をこらしていた。

先刻高い空から見えた街の灯火は機が下降するといったん見えなくなり、淡い月の光に照らされた砂漠が、澄んだ紺色の海のように眼下に拡がっていた。ところどころに灯火のともった家があると、それはちょうど海に浮かぶ船のように見えた。それほど砂漠の中の家はどれもが孤立していた。

(砂漠は陸の海だ)と雄三はふと口の中で呟いた。その言葉が誇張でないほど、今見下ろしている砂漠の色は蒼かった。

機がズーンと鈍い衝撃とともに着陸し、ジェットエンジンの逆噴射の音が聞こえはじめると、雄三は無意識に腰に手をやって座席ベルトをほどいていた。

やがて機が停止し、扉が開かれると、アラビア語の叫び声と共に、ムッとした熱風が機内に流れこんできた。それが肌に触れたとき、はじめて雄三は自分がアラビアに来たのを身体で感じ始めた。彼は扉

の方を見ながら少し目を細めて空気を嗅いでみた。何の匂いというのでもない、いわば乾きの匂いが彼にとって未知のものであった。

機から一歩出てみると、たちまち熱い空気がムッと雄三の身体を包んだ。(これは凄い。空気が赤く焼けているような気がする)そう思いながら、彼は他の旅客に混じって税関の建物に入っていった。

荷物の検査を受ける間、彼は乗客たちを眺めてみたが、日本人は一人もいなかった。

その視線を出口のほうに移していったとき、たくさんのイラク人の頭の後ろから伸び上がって手を振る永原の姿をみとめた。「やあ」と手を振る背の高い彼に雄三も笑顔を見せて手を振りかえした。

税関吏は雄三のトランクを無造作にかきまわしていたが、このとき彼の顔を見て、

「日本人か?」ときいた。

「そうです」

トランクの中には登山靴、折りたたみ式テント、シュラーフザック、手シャベル、そして植物の押葉標本をつくる押板などが入っていた。

「一体何かね、これは」

「私は植物学者です。この国の山へ登って植物を採集する道具です」

へえ、という表情をつくりながら、その一つを珍しそうにとりあげて隣の税関吏に見せた。その税関吏は無関心に軽く何か一言いった。

「オッケー」税関吏は言うと、案外人なつこい微笑を浮かべてトランクの側面に白いチョークで印をつけた。雄三はほっとした気持ちで、「サンキュウ」と言ってトランクを閉めにかかった。たちまち汗が額から頬にしたたり落ちた。別に課税される品物など持っているわけでもないのに、未知の国に入国するときの緊張で疲れた。

重い二つのトランクを引き摺りながら出口に進んでゆくと、密集した人々のかもし出す熱気が、汗に

ぬれた頬に生あたたかく不快に触れてきた。
「やあ、いらっしゃい」
銀ぶちの眼鏡を光らせながら、この初対面の人は明るく言った。背が高く、がっしりした身体つきで、色はかなり黒い。
「はじめまして、木下です。お世話になります」雄三は頭を下げた。
「たいへんだったでしょう」永原はトランクの一つに手を伸ばした。
「すみません」雄三はすばやくハンカチーフを取り出して首のまわりを拭いながら言った。「でも思ったより楽でした。ベイルートに一泊しましたから」
完成したばかりの空港の建物は飾り気がなかった。建物の外へ出ると、ふたたび強い熱気が二人を包んだ。
「何か匂いがありますね」
「サンドストームです。ひどいときは十日も続くんですよ。風速は低いんですが空は真っ赤になります。おーい、ズベリイ」
呼ぶ声に応じて、一台の車から一人のイラク人が出てきた。頭に赤い布をかぶり、黒い輪でおさえてある。
「このトランクを後ろに入れろ。そうだ、二つともだ。いいんですね、二つとも入れて……」
「ええ、結構です」
雄三はボストンバッグを自分で持って車に乗りこんだ。動き出した車の中で雄三は改まったように言い出した。
「どうもお忙しいところをご迷惑おかけします」
「いやあ、ようこそ。吉川君からも手紙をもらってお待ちしてました。たいへんですなあ、こんな国ま

で植物を採りにおいでになるなんて」
「はあ、どうも妙な用事でして……」
「近ごろはいろんな人がみえますよ。去年は考古学の……ええと、何てったかな、あの先生は……」
「高垣さんでしょう」
「そうだ、高垣さんだ。それにもう一人は推理小説の杉山清輝さん。お両方ともうちの社でお世話申し上げたんですがね」
「日本人もこの辺までどんどん来るようになったんですねえ。学生なんかもかなりたくさん来るってきましたが」
「ええ、バグダッドにはね。どうも、バグダッドというと夢を描いてやってくるらしいんですね」
「私もその一人です。さっき飛行機の窓からバグダッドの灯を見たら、胸がドキドキしましたよ」
「バグダッドなんて、巨大な田舎町ですよ。夜はきれいに見えても、昼になってごらんなさい」そう言って笑った。
空港から市内に通じる路の両側には高い水銀灯が並んでいる。その蒼白い光がアスファルトの表面を爬虫類の肌のように冷たく照らしていた。左右は砂漠である。路はほとんどまっすぐで、視野の果てまで続く水銀灯の列は砂嵐のためかうるんで見えた。
「砂嵐はちょいちょい起こるんですか？」
「春先に多いですね。私は五年もいるので馴れちゃいましたが、家内はだめです。これを嗅ぐと鼻孔アレルギーを起こすんです」
永原はそう言って強く吸ってみせた。自分がアレルギーでもないのに、鼻がつまっているらしい音が雄三には滑稽に聞こえた。しばらく行くと路の両側には次第に家屋が見えはじめ、やがて大きな青い円形屋根のある回教の寺院が現れた。

「いいですねえ。すばらしい」
「ええ」
永原は無頓着な答え方をした。あまりこういうものには関心がないらしい。
車がそこを通りすぎたあと、雄三は後部の窓から振り返って見た。円形屋根に並んで立つ高い塔には裸電球が明るくともっていた。砂嵐の立ちこめる夜空にそびえる人気もない寺院にともされた裸電球は、見る雄三に理由もなく胸をしめつけられるような寂しさを感じさせた。そして塀の足もとに吹きよせられた厚い砂の吹き溜まりはいっそうそれを強いものにした。
彼は一つの空想に耽りはじめた。
(自分は四歳か五歳の子供である。何かの事情で母親にこの国へ連れて来られたが、母親の行方は判らなくなってしまった。ひょっとすると母親は自分を捨てて遠くへ行ってしまったのかもしれない。自分は暗い夜の砂漠を一生懸命、母を求めてさまよっているが手がかりはない。どの家も砂嵐の中に固く扉をとざしていて、いくら叩いても開いてはくれない。もちろん知人などは一人もいない。銭は一円もなく、食物も飲物もない。遠くからのぞみ見たこの美しい寺院には、もしかすると情け深い僧侶がいて、自分を憐れんで助けてくれるのではないかと、疲れはてた足を引き摺って辿りついたものの、灰色の塀は絶望的に厚く、扉は固くとざされていて微動もしない。見上げる塔には明るい電灯がともされているのに、人の気配は全くない。吹きよせる無慈悲な砂嵐に、塀ぎわの吹きだまりは次第に厚くなって行くばかりだ)
これが雄三の癖であった。初めての国に到着すると、きまって何の役にも立たない物悲しい感傷にひたっては、自分の内部にまだ残されている弱さや幼稚さをほじくり出して、その存在を確かめてみるのであった。そのくせ、その結論はいつもきまっていた。
(愚劣な。誰だって身体が弱っているときや、見知らぬ異国に来て心細いときには、こういう空想に耽

るものなのだ。なにも自分に限ったことではあるまいに）

車は住宅地に入った。出来の悪い黄色い煉瓦を積んだ塀と、ナツメ椰子の大きな葉が黒くざわめくのが、ここの生活を荒々しいものに思わせた。

「さあ、もうすぐです。お疲れでしょう」

永原は先刻から黙りこんでいる雄三をいたわるように声をかけた。とたんに雄三は、暗い空想の雲をカラリと振り払って答えた。

「いいえ、ちっとも。実はあのすばらしい寺院を見てから夢を見ているような気持ちで、うっとりとしていたんです」

永原はちょっと意外そうな顔をしたが、あいまいにうなずいた。やはりそのようなことにはあまり関心がないのだろうと雄三は思った。車は夜の静かさの中に低いタイヤの摩擦音を響かせながら何度か曲がったのち、白い漆喰塗りの塀の前に停まった。塀の上からは夜目にも鮮やかな赤いブーゲンビリアの花が溢れるように垂れ下がっていた。

車の停まる音を聞いたのだろう。玄関の扉が開き、けたたましい犬の鳴声が門に近づいてきた。

「これ、ボニー。静かにしなさい。お客様よ」と叱る女の声がそれにつづいた。開いた扉の隙間から飛び出した毛の長い白い犬は永原にも雄三にも見さかいなくじゃれついた。

「これっ。うるさい。おい、お前、犬を……」

「いいんですよ。僕は犬が好きですから」

「あ、木下さん、いらっしゃいませ」

このときはじめて永原夫人が雄三を見て言った。中背の、どちらかといえば痩せ形の三十五、六歳と見える夫人は雄三にはびっくりするほど色が白く見えた。

「ズベリイ、お客さんのトランクを客間に運びなさい。それでと。今夜はこれで帰っていい。明日はい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

つものとおりだ」
持ち前らしい性急さで次々と用を言いつけた永原は、犬の頭を撫でながら夫人と話している雄三に向かって、
「さあ、お入んなさい。さあ」
椅子に腰を下ろし、上衣をぬぐとたちまち室の空気が爽やかに肌を生き返らせた。永原夫人が冷たい飲物を持ってくると、雄三はすすめられる間も惜しむようにそれを口へもっていった。ひどく喉が乾いていた。部屋を見渡すと、天井からはペルシャ風の真鍮製のランタンが下がっており、そのこまかな孔からは重くるしい光が床に敷かれた厚い絨毯の上に投げられている。椅子に置かれた羊皮のクッションには、アラビアの植物の精緻な図柄が刺繍されている。
「ずいぶん、アラビアのムードを出しておられますね。とてもいい」
「家内が好きなんですよ。スークへ行くと何でもどんどん買ってきちゃうんです」
永原は膝の上の犬をしきりに愛撫しながら「ところで……」と話題を転じた。
「イラクへおいでになって、どこへおいでになるおつもりですか」
「どこって、別にきめてないんです、っていうよりか、どこへ行ったらよいか判らないんです」
「それはたいへんだ。イラクって言っても広いですからね。大体の方角くらいきめないと……たとえば南とか北とか」
「北の方です。私が探している植物は砂漠には生えないので、北部の山地がいいと思います」
「北部はたいへんですよ、行くのが。何しろ政府とクルド族がついせんだってまで戦争してたんですから。行けるかどうかまだ判りませんねえ」
「大丈夫です。何とかして強引に入っちゃいますよ」
永原は少し笑って、

「いや、貴方がよくっても相手が許してくれるかどうかですよ。とても排他的な連中ですからね」
「それは困ったなあ。そんなにむつかしいのですか。いろんな人が来ているから大丈夫かと思ったんですがね」
「皆はそんな奥まで行きませんでしたからね。メソポタミア文化の調査くらいなら、大して奥地に行かずにやれますから」
そう言いながら机の上の地図を拡げた。それは市や村落の名前が記入されているだけの粗末なもので、地形などは判別しようもない代物である。
「こんなのしかないんですよ、この国には。これだって三枚以上は売ってくれません。あまりたくさん買うとスパイと間違えられるんでね」
「スパイですか？」
「ええ。私なんかQ商事の駐在主席をやっているだけですが、しょっちゅう尾行されますよ。去年なんか電話を切られちゃって往生しました。手紙だって検閲されるんです。第三国人を使ってるってききましたがね」
「いやだなあ。僕なんかも疑われるかな」
「いや、冗談でなく本当ですよ。北部へゆくには特別許可証が要りますがね。それをもって行っても大丈夫かどうか判らないんです」
「その特別許可証はどこでくれるんですか」
「軍と保安局と警察をまわらなきゃなりません。たいてい二ヵ月かかるって言われてます」
「二ヵ月？」と雄三は大げさに目を丸くした。しかし、心の中では（驚くことはない。開発途上国でそれくらいは普通だ。袖の下でも出せばもっと早くなるものだが）と考えていた。それでも彼は気が滅入った。（もし相手が袖の下を受けとらずに、本当に二ヵ月もかかったらどうしよう。今日は五月十八日

だから、七月中旬か下旬になってしまう。それよりもバグダッドで二ヵ月の間、何をして過ごそうか）
「二ヵ月かかるとしたら、その間バグダッドのまわりで採集できますか」
「だめでしょう。町のはずれに検問所があって、ここでもその許可証を見せなければ通してくれませんから」
「いやあ、ひどいなあ。すると許可証がないと一歩も町から出られないってわけですか」
「そうです」
「うーむ、困ったな。僕は明日の朝早く出発して、できればこのアマディアという町へ行くつもりだったんですがねえ」そう言いながら雄三が地図の上で指さしたのはトルコ国境すれすれの位置にある町だった。とたんに永原は椅子の背にそり返って笑いだした。
「そりゃあ無理ですよ。とうてい無理ですよ。焦らずに気長におやんなさい。この国で慌てたって始まりませんから」
　気が重くなって返事もはっきり出来なくなった雄三をいたわるように永原は言った。
「それとも急いで学校へお帰りにならなきゃいけないんですか」
「いいえ、その方はいいんです。長期の休職にしてきましたから。私は二ヵ月も何もすることがないっていうのがいやなんです。待つってことと、退屈だということが死ぬほど嫌いでしてね」
「ははは。それは全く同感です。私もこう見えてもひどいセッカチでしてね。五年もここにいますが、ちっとも治らない」
　そこへ召使いの女が紅茶を持って来た。中肉中背の、やや色の浅黒い女だった。紅茶を雄三の前に置いて黙礼したとき、黒い睫毛に陰った大きな眼が雄三を見た。その目つきは召使いが客を見る目つきではないことに彼は気づいた。普通なら非礼ともいうべき強い好奇心がたたえられた視線であった。女が去ってから雄三は永原にきいた。

「あの女中さんはアラビア人ですか？」
「いや、あれはアッシリア人です。マリーンという名です。アッシリア人っていうのはイラクの北西部に住んでいて、ヨーロッパ人のように色が白くて金髪のも多いんですよ。もっともあの子はあまり白くもないし、金髪でもありませんがね。あ、そうだ。あの子はアマディアの少し手前の……」そう言いながら地図を指して、「ほら、ここです。サルサングと書いてある。シャーシングというんですがね。この出なんですよ。だから木下さんがもしあちらに行かれるんでしたらお役に立つかもしれませんよ」と言った。
雄三はそれがひどく頼りになる情報のように思えて、ほっとした表情になりながら茶碗に手をのばした。

翌朝、九時ごろ目をさました雄三は、寝室のカーテンを引いて空を見ると顔をしかめた。
空は依然として砂嵐のため赤褐色に曇っていた。邸の庭に生えているナツメ椰子の木が黒く不気味にゆったりとゆれていた。木や草の乏しい土地なのに、ナツメ椰子だけは二階の窓から見渡すと、あちらにもこちらにも見られた。しかも、奇妙なことにそれらの葉は緑色には見えず、褐色に濁って見えた。
（いやな木だな。毎日こんな木ばかり眺めていたらおかしくなっちまうだろうな。永原さんだって、多かれ少なかれ侵されているのかもしれない。自分だったら半年で確実におかしくなるだろう。いや半年どころじゃない、二ヵ月で完全に駄目になる。ここでは空が青くないばかりか、木まで緑でない。太陽も見えない）
そう思いながら太陽の方向に目を転じた彼は、はっと息を呑んだ。赤褐色の空に目もさめるばかり鮮やかな青い太陽を見つけたのだ。まだ見たこともない美しい青い太陽が、ゆったりと昇って行く姿は、遠いアジアからやって来た雄三にはたとえようのない不思議な眺めであった。子供のときから今日まで

太陽を赤いもの、あるいは黄色いものとして熱感とともにとらえてきた雄三には、冷たく青く輝く太陽は全く未知の新しい恒星であった。彼はパジャマを脱ぎ、ワイシャツに手を通しながらも、何度か窓からその青い太陽をのぞいて見た。

朝食のテーブルにつくと永原は新聞から目を上げて言った。

「おやすみになれましたか。砂嵐が匂うでしょう」

「いいえ、ちっとも。よく眠りました」

「うむ。来たてのころはかえって匂わないのかな」

そこへ昨日の女中が日本茶を運んできた。昨夜、浅黒いと思ったが昼間みるとそれほどではなく、むしろ肌が青味をおびて見えた。水色のワンピースを着ているが、足は裸足である。それがいかにも彼女を召使いらしく感じさせた。

永原が新聞をたたみながら言った。

「今日、私の事務所へいっしょにいらっしゃい。いろいろな手続きをしてあげましょう。うちの使用人でそういう仕事に馴れたのがいますから」

「そんなことお願いできますか」

「主人はそういうの好きなんですよ。遠慮なくお申しつけ下さいませ」と永原夫人がトーストを焼きながら口をはさんだ。

「大助かりです。書類を出すといってもいったいどこへ行ったらいいのか、見当もつきませんのでね。お世話になります」

「イマヌエルがいい。あいつは保安局に顔が利くから」

「そうね。あの人ならうまくやるわ」夫人も相槌を打った。

食後、永原は雄三を連れてQ商事の事務所に行った。バグダッドの目抜通りに面したビルの三階にそ

れはあった。ビルの玄関や階段は埃っぽく、それにどことなく安物造りの感じがした。人造石の床も手入れが悪く、肌が荒れていたし、窓のサッシには空家のように白い埃が溜まっていた。置かれている観葉植物でさえ死んでいるように無気力に感じられた。そんなところにも雄三はたえずアラビアを感じていた。

事務所に入ると永原は現地人の事務員と手早く会話を交わしてからイマヌエルを呼ばせた。入ってきたのは赤ら顔の、目つきの鋭い一癖ありげなシリア人だった。しかし、雄三と握手をして会話を重ねると急速に打ち解けてきた。永原が部屋を出て行くと、

「任せて下さい。絶対二ヵ月もかからずにやってあげますよ」と彼は言った。

「私は親友が保安局にいるので、今までずいぶん人を助けました。こういう国は何といっても顔が大切です。顔が利かなければ何も出来ません。袖の下だって顔が利かなきゃ受け取ってくれませんからね」

雄三は少しいやな気がした。顔を利かせてやるからと言って暗に礼金を要求されたように感じたのだ。その上、役人に袖の下を出さねばならないのかと思うとさらに不快だった。けれども、金額にもよるが二ヵ月も無為に待つよりはましかもしれないと思った。

「袖の下はいくらぐらいですか」

「知りません」とイマヌエルは意外にあっさり言った。「今まで外人で北イラクの山の中に入った人はいませんからね。やってみなくては判りません。あるいは一フィルスもとられないでうまくゆくかもしれません」そう言いながら立って行って永原の室との境の扉を閉めた。そして声を低めて言った。

「ドクター・キノシタ。お願いがあります」

(そら、おいでなすった)

「あなた、ドル持ってますか」

ないとも言えなかった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com